

感謝

京都文教高等学校三年（京都府）

長谷川 麻央

高校に入って茶道の授業を受け始め、今年で三年目となります。

それまでは茶道を習った経験も、自分でお茶を点てたこともありませんでした。入学してすぐの頃は、夏は涼しく、冬は暖かく、お茶やお菓子が出てくる快適な空間というくらいの感覚でした。作法は知らず、見たことのない花や軸が飾られ、長い時間正座をしなくてはならない苦痛な時間でもありました。ただ、毎回お茶を点てることは楽しみでもありました。みんなシャカシャカと良い音が鳴って、きめ細やかな泡が立って茶道室にお茶の香りが漂います。私は上手く点てられず、私のお茶碗はいつも、何度やっても真緑で、苦そうで、大きな泡が数個できているだけでした。そのため、「相手と交換してください」と言われるのが嫌でした。自分は相手の美味しいお茶が飲めるけれど、相手には私の苦いお茶が回ってしまうことが悔しかったことを今でも覚えています。

それでも、「今日こそ良いお茶を点ててやる」「来週こそは美しいお茶を点てる」と週に一時間しか無い授業を楽しみにもしていました。

しかし、新型コロナウイルスの感染が拡大し、長い期間休校となりました。その期間はリモート授業となり、お茶を点てることは出来ませんでした。学校が始まり、やっとお茶を点てられると楽しみにしていました。二年生の一年間、そして三年生になった今でも感染対策からお茶を点てることは出来ていません。

お茶が点てられない、お菓子が食べられない茶道の授業は、一気に退屈なものへと変わりました。難しい作法、言葉、長い時間の正座はあれほど楽しみにしていた茶道の授業とはかけ離れていました。そのため、私にとっての茶道は正座を崩し、作法は曖昧で、隣の子とお喋りをする、そんな時間へと変わっていきました。頭の片隅に、「こんな態度をとってはいけない」と思うことは何度もありました。それでもなかなか変われずにはいました。

しかし、変わるきっかけが巡ってきました。授業中に先生がおっしゃった「お茶会が開かれることに感謝の気持ちを持つことが大切です」という言葉がそれでした。

私は陸上競技部に所属しています。小学校四年生の頃から始めて八年目になります。

「感謝の気持ち大切にする」

これは競技をする際にいつも頭に置いていることです。先生がおっしゃった「感謝」という言葉にハッとしました。

確かにお茶やお菓子のない茶道は、私の知っている楽しい茶道とは違っています。ですが作法をきちんとすること、ひとつひとつの所作を丁寧に気持ちを込めてすることは、競技にも繋がると思うようになりました。

それからはお喋りをしたい気持ちを抑えて、茶道室の他では感じられない独特な香りや静かな空間の中で、動きから出る小さな音を感じたり、心を落ち着けてお茶を実際に点てるイメージをするよう授業態度に改めました。

卒業までに一年生の頃のような授業ができるかは分かりませんが、いつその時が訪れても良いように、毎回の授業を集中して取り組もうと思います。

次にお茶を点てる機会があるのであれば、恥ずかしくないよう、きめ細やかで美味しそうなお茶を点てたいです。それまでは感謝の気持ちを忘れずに、茶道に関わっていきます。